

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

2023年 9月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 足立 恵理子

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> <u>口頭</u> ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )			
発表題目	Yanagi Muneyoshi's Mingei Theory: The Antithesis of Academic Aesthetics?			
開催場所	University College Cork. Cork, Ireland			
渡航期間	2023年 9月 5日 ~ 2023年 9月 11日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000 円		
	使用した助成金額	350,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳  (差し支えなければ要した経費総額をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	268,280	
		宿泊費	94,709	
		滞在費	21,870	
学会参加費		0		
その他	9,093			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 大変助かりました。滞在費等にも充当できるのが有難いです。ただ、円安の場合には少し足りないかもしれません。			

## 成果の概要／足立恵理子

2023年9月7日～9日、アイルランドのコーク大学（University College Cork）で開催された European Network of Japanese Philosophy 7th Annual Conference に参加した。ヨーロッパを中心に開催されている学会で、ドイツ・フランス・イタリア・スペインなどヨーロッパ諸国からの参加者に加え、アメリカ・カナダ・ブラジルなどの北米・南米からの参加者、そして韓国・中国・日本からの参加者がおり、国籍に富んだ構成員となっている。また、今大会のテーマは”Taming the Wild Fox: The Contradictions of Academic Philosophy”となっており、西洋哲学の受容とそれ以前のアジア的な思想伝統との対立に焦点が当てられている。

1日目は、飛行機の遅延により、予定されていた Yuriko Saito（斎藤百合子）氏による講演ではなく、Kiri Paramore 氏による講演を拝聴。その後の学会側が用意してくれた夕食会では、講演後に到着された斎藤百合子氏と議論する時間を持つことができた。報告者の研究課題である柳宗悦に関する斎藤氏の見解も聞くことができた。また、現代の日本の生活工芸のデザイナーたちの実践と柳宗悦の民藝の美学の連続性についても対話した。

2日目は、他の参加者による発表を拝聴し、ランチタイムや各セッションの前後に設けられたコーヒースタンドの時間には他の参加者と交流し、意見を交わした。

3日目は、発表時間に変更があり、午前のセッション（Aesthetics）で発表することとなった。”Yanagi Muneyoshi’s Mingei Theory: The Antithesis of Academic Aesthetics?”という題で、柳宗悦が当時のいわゆるアカデミックに属する美学者（大西克礼や阿部次郎）たちとどのような交流状況にあったか、またどのような思想的な接点があったかに言及し、アカデミックな美学に対して柳が展開した“新たな美学”としての“民藝”について発表をおこなった。日本では民藝運動で有名な柳宗悦だが、ヨーロッパでの認知度はあまり高くなく、柳の名前を知らない参加者も多かったが、多くの質疑応答を交わすことができた。特に、柳が民藝論の中で展開する「徳」の性質に関する質問が興味深かった。柳の「徳」は「生活を妨げない」という性質であり、西洋の「徳」（virtue）にはあまり見られないもので、その点に対する質疑から生じた議論には他の参加者も加わり、大変有意義なものとなった。西田幾多郎や田辺元といった“大きな”主題に対する哲学を展開する哲学者がいる一方で、柳は小さな問題から形成されるわれわれの日常にコミットする”small philosopher”ということができるのではないかと、との感想ももらった。また、最後は1日目に予定されていた斎藤氏の講演を聞くことができた。斎藤氏は日本の美的な実践の伝統と現代美学の議論を結び合わせる著書を複数執筆しており、それらの著書に基づく内容であった。公演後には再び話をすることができ、現代における美学議論が倫理的な問題へと接近している点などについて議論を交わした。

総じて、実りある機会となり、報告者の今後の研究の進展に重要な機会となった。今回得られた交流や議論を踏まえ、論文としてまとめ、海外のジャーナルに投稿する予定である。

このような貴重な機会に向けて助成していただいた京都大学教育研究振興財団には改めて深くお礼申し上げたい。